

〔編集後記〕

『社会科学ジャーナル』第33号をお届けします。

本号の巻頭論文の共著者の高山晟教授は本学第Ⅰ期生で、卒業後ロチェスター大学で学位を得た後、国際経済学の理論家として世界的名声を博しました。その著書は世界の有名大学で広く教科書として使われています。本学国際関係学科創設後は、母校ICUでその持ち前の情熱あふれる学生指導を続けてこられました。昨年初め以来体調を崩し、痛惜ながら、1996年1月3日、不帰の人となりました。ここに謹んで哀悼の意を表わします。

さて、本号より、社会科学研究所で開催又は共催したシンポジウム・講演会の内容の要約を新企画として加え、掲載することになりました。1994年から1995年にかけて、社会科学の諸分野の講演会を幅広くスポンサーし、研究者、学生、市民の多くの皆様に学内外からご参加いただいたことを嬉しく思います。今後も第一線でご活躍されている方々に講演をお願いし、貴重なお話しの内容、ことに新しい考え方やアプローチを、なるべく多くの方々にお知らせしたいと思っています。

また、当研究所と上智大学社会正義研究所は、1994年12月に「日本の植民地支配とその責任—後の世代につたえるもの—」をテーマに第14回国際シンポジウムを開催。海外からの研究者と日本人研究者で基調報告・討論が行われ、多くの方々にご参加いただき有意義な成果を得られたことに感謝しています。本号には、このシンポジウムの基調報告と事例報告の「要約」を掲載しています。これらは日本の植民地支配をふりかえり、世界と共に生きることをもとめる日本の将来を考える上で、非常に重要な視点・示唆を含んでいます。

1996年秋には、そのシンポジウムの成果を踏まえ、上智大学と共催で、また関係諸機関にも協力を要請し、「アジアとの歴史認識の共有を求めて」と題し、国際シンポジウムを開催したいと考えており、現在準備をすすめている次第です。アジア諸国から国際関係、文化交流、歴史、教育、ジャーナリズムなどの諸分野の第一線で活躍している研究者、言論人を招き、日本の研究者、言論人との討論を通じ、お互いに学び合い、アジア諸国の人々との歴史認識の共有の方途を探る機会を提供したいと思っています。

(功 刀 達 朗 記)